

学生が考える学習時間が短い理由とその対策：平成 29年度九州大学学生モニター会議活動報告

中世古, 貴彦
九州大学教育改革推進本部

丸野, 俊一
九州大学

<https://doi.org/10.15017/1912800>

出版情報：基幹教育紀要. 4, pp.43-56, 2018-03-23. 九州大学基幹教育院
バージョン：
権利関係：

学生が考える学習時間が短い理由とその対策 平成 29 年度九州大学学生モニター会議活動報告

中世古 貴彦^{1*}, 丸野 俊一²

¹九州大学教育改革推進本部, 〒819-0395 福岡市西区元岡 744

²九州大学, 〒819-0395 福岡市西区元岡 744

The reasons and measures for the short study hours of the students An activity report of Kyushu University student monitors

Takahiko NAKASEKO^{1*}, Shunichi MARUNO²

¹ The University Education Innovation Initiative, Kyushu University, 744, Motooka, Nishi-ku, Fukuoka 819-0395, Japan

² Kyushu University, 744, Motooka, Nishi-ku, Fukuoka 819-0395, Japan

*E-mail: nakaseko.takahiko.434@m.kyushu-u.ac.jp

Received Sep. 20, 2017; Accepted Nov. 29, 2017

Kyushu University appoints “student monitors” in order to hear opinions and proposals from the students regarding the university’s policies for education, student support, and career support among other things. Convened for the first time in 2006, student monitors meetings have been held once or twice a year every year. In 2017, the agenda designated to the student monitors was “why is the study hours of Kyushu University’s students so short?” According to a student survey of 2015, more than 40% of the students hardly prepared for and reviewed classes; apparently, those students did not study until the test week. Through two web-based questionnaires and two meetings, the student monitors, informed by analyzed data, shaped their collective view on the reasons and measures for the short study hours. The conclusion of the discussion of the student monitors was reported to the executive vice presidents in August and then disseminated to the whole university through the Education Planning Committee in September. This article describes how the student monitors discussed the topic and what opinions and proposals they reached.

1. 学生モニター会議について

九州大学学生モニター会議は、九州大学の「教育、学生生活支援及び就職支援等に関する取り組みを実施するに当たり、本学の学生から意見や提案等を聴取する」（九州大学 2016）ことを趣旨とする制度である。平成 18 年度の制度創設以降、毎年度 1~2 回程度開催されてきた。近年では、例えば「身体障がい学生に対する伊都キャンパスの環境について」（平成 26 年度第 1 回）、「留学生・日本人学生間の更なるコミュニケーション促進について～国際学生寮の事例から考える～」(平成 27 年度第 1 回)、「『e ポートフォリオ』の利活用について考える」（平成 27 年度第 2 回）、「九大生が考える理想の大学教員像」（平成 28 年度）等がテーマとされてきた。

さて、平成 27 年度学生生活実態調査によると、表 1 に示すように九州大学の学生の 4 割強は試

験前以外にほとんど予習復習を行わず、また約 8 割の学生は 1 日に 1 時間程度かそれ以下の予習復習しか行わない (九州大学学務部 2016: 68)。「このような状況を改め、アクティブ・ラーナーを育成するためには何が必要か。(中略) 教育改善に向けた様々な取組について、学生の目線から議論する」(九州大学学務部学務企画課 2017) ため、平成 29 年度は「なぜ学生の学習時間は短いのか？」をテーマとして学生モニター会議を開催することとなった。本稿は、学習時間が短い理由とその対策について、学生モニターらがどのように議論を重ね、いかなる結論を導いたのかを報告する。

表 1 大学の授業時間以外に大学の授業内容の予習復習に費やしている時間 (1 日当たり) *

区分		試験前以外に ほとんどない	30分 程度	1時間 程度	2時間 程度	3時間 程度	4時間 以上	無回答	合計
学部生	n	1762	998	914	343	109	104	77	4307
	%	40.9%	23.2%	21.2%	8.0%	2.5%	2.4%	1.8%	100.0%
大学院生	n	1067	355	340	210	130	183	152	2437
	%	43.8%	14.6%	14.0%	8.6%	5.3%	7.5%	6.2%	100.0%
合計	n	2829	1353	1254	553	239	287	229	6744
	%	41.9%	20.1%	18.6%	8.2%	3.5%	4.3%	3.4%	100.0%

*九州大学学務部 (2016: 68) に基づき作成。

2. 平成 29 年度のスケジュール

平成 29 年度学生モニター会議は、表 2 のスケジュールにより実施された。年度初めの時点では学生モニター的人数がやや少なく、出身学部・学府に偏りが生じていた。学生の多様な意見を取り込むため、各学部・学府にも協力を依頼して追加の募集を行った結果、ほぼすべての学部・学府から総勢 45 人の学生モニターを任命することができた。

ただし、実際には授業やアルバイト等の各自の都合のため、全員が一堂に会することはほぼ不可能であった。そのため、話し合いの場 (学生モニター会議当日) に出席できない学生モニターからの意見も反映させるため、アンケートを行うことが企図された。その際、学生モニターが様々な学習活動に充てている時間 (学生生活実態調査では予習復習時間しか把握されていない) や近年の教育改革関係の取り組みに関する認識や経験などに関するデータも同時に収集すれば、議論を深める素材を得ることができると考えられた。また、Moodle のアンケート機能を用いれば、事務局側が迅速かつ低コストでデータを収集・集計できるだけでなく、これまで LMS (Learning Management System) に馴染みがなかった学生にとっても実体験を得る良い機会となり、それ自体が議論を深める助けになると期待された。

そこで今回は、学生モニターとの連絡調整のほとんどを、Moodle 上に開設した学生モニター会議のためのコース上で行うこととした。まず、6 月上旬に Moodle 上でプレ・アンケートを行い、その分析結果をフィードバックしつつ第 1 回学生モニター会議を 6 月 21 日に開催した。そこで議論された内容を Moodle 及び BookRoll 上で欠席した学生も含め全員で共有したうえで、6 月下旬にポスト・アンケートを実施した。こうして、様々なデータの分析結果や他の学生モニターの意見も踏

まえたうえで改めて聴取した各自の意見をフィードバックしつつ、第2回学生モニター会議を7月19日に開催した。その後は中心となる学生2人がこれまでの議論を発表用のスライドとして取りまとめ、8月8日に学生モニターの任命権者である教育担当理事に報告した。以下では、これらの活動内容について個別に説明していく。

表2 平成29年度学生モニター会議のスケジュール

時期*	活動内容	備考
4～5月	学生モニターの公募	計45人が応募
6月上旬	プレ・アンケートの実施	n=33 (回答率73.3%)
6月21日	第1回学生モニター会議	参加学生22人、会場は新中央図書館(伊都)
6月下旬	ポスト・アンケートの実施	n=21 (回答率46.7%)
7月19日	第2回学生モニター会議	参加学生19人
7月下旬～8月上旬	報告スライド準備	代表学生2人が取りまとめ
8月8日	理事報告会	参加学生7人

*いずれも平成29(2017)年。

3. 学生モニターの議論の軌跡

3.1. プレ・アンケート

6月上旬に実施されたプレ・アンケート(n=33、回答率73.3%)では、Moodleのアンケートフォームを用いて表3に掲げた内容について尋ねた。全設問の集計結果を掲載することは紙幅の都合で困難なため、学生モニターの学習時間等の平均値(Q05～Q14)と、学習時間が短くなる原因とその対策について尋ねた自由記述回答(Q30)の集計結果について紹介する。

表3 プレ・アンケートの内容

設問	内容	設問	内容
属性等	Q01 性別		Q15 少しでも良い成績を取りたいか
	Q02 課程区分		Q16 難しい授業が多くてついていくのが大変か
	Q03 所属部局	教育に関する認識や経験	Q17 単位を落とす人が多少増えようが成績評価は厳格な方がよいか
	Q04 学年		Q18 履修する授業が多く各授業の学習が薄くなりがちか
時間	Q05 授業出席時間		Q19 宿題・課題を多くして学生にもっと勉強させるべきか
	Q06 予復習時間		Q20 講義形式より討論形式・ワークショップ形式を増やしてほしいか
の	Q07 研究時間		Q21 自由に学習出来る空間がキャンパス内に不足しているか
使	Q08 自主的な学習時間		Q22 Moodleの活用度
い	Q09 睡眠時間		Q23 Maharaの活用度
方	Q10 通学時間		Q24 BookRoollの活用度
	Q11 課外活動時間		Q25 カリキュラム・マップの活用度
	Q12 就労時間(社会人のみ)		Q26 科目ナンバリングの活用度
	Q13 アルバイト時間		Q27 シラバスの活用度
	Q14 その他の時間		Q28 ルーブリックの活用度
			Q29 GPA2.0以上の卒業目安化は好ましいか
			Q30 学習時間が短い原因と対策(自由記述)

学生モニターの時間の使い方を集計した結果が表 4 である。学生モニター全体の平均では、1 日当たり授業出席に 2.6 時間、授業の予習復習に 1.5 時間、研究に 3.4 時間、授業や研究と直接関係ない内容に関する自主的な学習に 1.7 時間を費やしている。つまり、授業も含め 1 日当たり 9.2 時間、授業を除けば 6.6 時間を何らかの学習活動に費やしている。サンプルサイズが小さいため課程別の集計の正確さは心許ないが、学士課程と比べて修士課程や博士課程では授業出席時間が短くなり研究時間が増える傾向が見て取れる。いずれにせよ、表 1 で見たような多くの学生が学業に殆ど時間を費やしていないと言う状況は、あくまで授業の予習復習に関してであって、大半の学生は予習復習に限らず何らかの学習を行っていると考えられる。

ただし、次の点には注意を要する。後述のように平成 27 年度学生生活実態調査のデータからは、学生全体の予習復習時間の平均値は概ね 40 分台と推定される。つまり、学生モニターは一般的な学生の約 2 倍の時間（1.5 時間）を授業の予習復習に費やしていることになる。データが存在しないため研究時間や自主的な学習の時間の多寡を一般的な学生と比較することは不可能だが、学生モニター会議はかなり勉強熱心な学生の声を反映している可能性がある。

表 4 学生モニターが授業期間中の典型的な一週間に各活動に費やす時間の 1 日当たりの平均*

活動内容	学生モニター 全有効回答	学士課程	修士課程	博士課程	専門職 学位課程	学部 研究生
授業出席	2.6	3.9	1.4	0.5	3.0	1.5
予習復習	1.5	1.9	1.2	0.5	0.0	3.0
研究	3.4	1.2	5.4	8.5	0.0	4.0
自主的な学習	1.7	1.7	0.8	1.3	10.0	3.0
睡眠	6.8	6.6	7.1	6.3	7.0	7.0
通学	1.0	1.0	1.1	1.2	0.5	0.5
課外活動	1.4	1.8	0.7	2.3	0.0	0.0
就労（社会人のみ）	0.3	0.0	0.0	2.7	0.0	0.0
アルバイト	1.2	1.7	1.1	0.0	0.0	0.0
その他	4.2	4.4	5.3	0.7	3.5	5.0
サンプルサイズ	n=26	n=13	n=8	n=3	n=1	n=1

*合計が 24 時間にならない等の問題のあった 7 ケースを除外して集計。

表 5 は、「九州大学の学生の学習時間が短い理由は何だと思えますか。また、大学はどのような策を講じることができると思えますか」という問いに対する自由記述回答の頻出上位 50 語の一覧である。分析には KH Coder ver. 2.00f を使用した。上位の語には「時間」「勉強」「思う」と言った一般的な語が多い。その中で、アルバイト（16 回で 12 位）と課外活動（14 回で 16 位）は、明らかに理由として挙げられていることが分かる語としては上位に位置付いている。実際の回答内容を確認すると、もちろんその他の様々な観点からの意見も寄せられていたが、経済的に苦しいためにアルバイトをせざるを得ない、（それなりの理由があつて）課外活動に時間を割いている、といった回答が多数見られた。以下はその一部である。

[Students] have to go for part time job or other source of income and they don't get enough time

for study. (大学院等、女)

経済的不況の影響で、学生はアルバイトを余儀なくされている。(大学院等、男)

今の大学生は自分の将来に対する明確な目標を持っていないため、(中略) 学生にとって、とりあえずやろうと言うものが勉強ではなく、アルバイトや部活だと思います。(学部、女)

There is a[n] overload of school work to meet deadlines for, some students may have part time jobs to pay tuition or survive and if they have extracurricular activities to help relieve school stress that also takes time away from properly study or have time to review lessons. (大学院等、女)

表 5 プレ・アンケート自由記述回答の頻出 50 語*

抽出語	回数	抽出語	回数	抽出語	回数	抽出語	回数	抽出語	回数
時間	63	多い	27	評価	13	良い	9	学ぶ	7
勉強	61	アルバイト	16	テスト	12	挙げる	8	学部	7
思う	60	試験	16	単位	12	原因	8	持つ	7
授業	55	人	15	目標	12	高校	8	取り組む	7
学生	51	内容	15	教員	11	取れる	8	選択	7
学習	47	課外活動	14	少ない	10	増やす	8	他	7
大学	47	課題	14	予習	10	対策	8	キャンパス	6
考える	31	理由	14	感じる	9	入学	8	簡単	6
講義	31	興味	13	参加	9	問題	8	九州大学	6
必要	28	自分	13	復習	9	科目	7	形式	6

*一部の語は以下のように置換した上で分析した。生徒→学生、サークル・部活→課外活動、バイト→アルバイト、教師・先生→教員、九大→九州大学。また、「課外活動」は語として強制抽出した。留学生からの英語の回答(3件)は、筆者が日本語訳した上で分析対象に含めた。

3.2. 学生生活実態調査の分析結果との乖離

プレ・アンケートの結果が示す通り、経済的困難を背景にしたアルバイトや、課外活動への参加は、本当に予習復習時間の全体的な短さの主要な原因なのだろうか。学生モニターが実際に集合して議論する際により客観的な議論が可能となるように、これらの点について平成 27 年度学生生活実態調査のデータを用いて事前に検証を試みた。

まず、アルバイトの理由別の予習復習の平均時間を推定した。表 1 に示した 6 段階の予習復習時間を相当する時間で読み替えて(分換算して)、平均等の統計量を集計した結果が表 6 である。プレ・アンケートの回答にあったように、苦しい経済状況を背景にした長時間のアルバイトが学習に充てる時間を圧迫するならば、「経済的に困難」「家族からの自立」等の理由のためにアルバイトを行わざるを得ない者は、「小遣い確保」というさほど深刻ではない理由のためにアルバイトを行う

者よりも、予習復習時間が短くなるはずである。しかし、「小遣い確保」を理由とする者の平均値は34.1分と最も少なく、「経済的に困難」(52.5分)や「家族からの自立」(51.7分)を理由とする者の平均値よりも18分程短い。Shapiro-WilkのW検定を行ったところ、予習復習時間が正規分布していると言う帰無仮説は棄却された(いずれの群でも $p<.0001$)。そこで、ノンパラメトリックな検定であるKruskal-Wallis検定を行ったところ、群間に有意差が認められた($\chi^2=43.943, df=4, p<.0001$)。さらに、Steel-Dwass検定によるノンパラメトリックな多重比較をすべてのペアについて行ったところ、「小遣い確保」群と、「家族からの自立」「経済的に困難」「社会経験」の3群との間には、いずれも1%かそれ以下の水準で有意差が認められた。この結果は、経済的に苦しい状況に置かれている学生の方がそうでない学生よりも予習復習に多くの時間を充てているということを意味している。つまり、プレ・アンケートに寄せられた学生モニターの素朴な認識は、学生の実態と必ずしも一致していなかった。

表6 アルバイトの理由別の1日当たりの予習復習時間*

アルバイトの理由	n	平均(分)	標準偏差	標準誤差
a その他	73	53.4	75.9	8.88
b 経済的に困難	912	52.5	71.7	2.38
c 家族からの自立	216	51.7	67.2	4.57
d 社会経験	442	46.3	55.9	2.66
e 小遣い確保	1856	34.1	49.8	1.16
全体	3499	41.9	59.3	1.00

*6段階の回答に次のように数値を与えて集計した。試験前以外にほとんどない→0分、1日30分程度→30分、1日1時間程度→60分、1日2時間程度→120分、1日3時間程度→180分、1日4時間以上→240分。多重比較の結果は $e < bcd$ 。

次に、課外活動と予習復習の関係を分析した。表7は、課外活動(学生生活実態調査では「サークル活動」と表記)の状況別に予習復習時間を集計した結果である。Shapiro-WilkのW検定を行ったところ、予習復習時間が正規分布していると言う帰無仮説は棄却された(各群1%かそれ以下の水準で有意)。そこで、Kruskal-Wallis検定を行ったところ、群間の分布に有意差が認められた($\chi^2=110.450, df=4, p<.0001$)。さらに、Steel-Dwass検定を用いてノンパラメトリックな多重比較をすべてのペアについて行ったところ、予習復習時間の平均値が31.3分と最も短い「体育系サークルに加入」群と、「加入していない」(57.8分)、「文化系サークルに加入」(42.9分)、「加入していたが中途退部した」(40.1分)の3群との間に、1%かそれ以下の水準で有意差が認められた。この結果は、確かに課外活動(特に体育系サークル)が予習復習時間を減少させていることを示すようにも見える。ただし、「学外のサークルに加入」の場合は予習復習時間の平均をむしろ増加(62.6分)させている。また、(この場合は大学への不適応を心配すべきかとも思われるが)中途退部した者の予習復習時間も、今は課外活動を行っていないにもかかわらずやや短くなっている。課外活動のために勉強時間が奪われるという単純な図式では、このような状況を十分に説明できない。

表 7 課外活動の状況別の1日当たりの予習復習時間*

課外活動の状況	n	平均 (分)	標準偏差	標準誤差
a 学外のサークルに加入	102	62.6	77.5	7.67
b 加入していない	2372	57.8	74.3	1.53
c 文化系サークルに加入	1528	42.9	52.6	1.34
d 加入していたが中途退部した	683	40.1	58.4	2.24
e 体育系サークルに加入	1815	31.3	44.9	1.05
全体	6500	45.1	61.6	0.76

*表 6 と同様に、6 段階の回答を分換算して集計。多重比較の結果は $e < abc$ 、 $d < bc$ 。

そこで、課外活動を行っている者のみを対象にもう少し詳しく分析を行うこととした。まず、課外活動に費やす時間（1週間当たり）と予習復習時間との相関係数を求めたところ、 $n=3332$ と人数が多いため 0.1% 水準で有意 ($p < .0001$) ではあるが、 $r = -.074$ と極めて微弱であった。つまり、課外活動時間の長短と予習復習時間の長短が多少相関するとしても、強いバスター関係ではない。また、課外活動を行っている学生に、課外活動と学業との関係を尋ねた結果が表 8 である。課外活動が「学業をかなり犠牲にしている」と回答している者の割合は、学部生で 3.3% 、大学院生で 1.8% と極めて少数である。「学業を少し犠牲にしている」と回答した者の割合も、学部生で 21.6% 、大学院生で 7.9% と少数である。大多数の学生は「学業に影響はない」（学部生 68.7% 、大学院生 75.7% ）と回答している。つまり、学生モニターのプレ・アンケートの回答とは裏腹に、大半の学生は学業を圧迫するほど課外活動に注力しているわけではない。これらのことから、課外活動にのめり込んで予習復習が疎かになるとする言説は、一部の学生には当てはまるかもしれないが、予習復習時間が短いという全体的な傾向を説明するにはやや説得力に欠けると言える。

表 8 課外活動と学業との関係*

区分	課外活動と学業との関係					合計
	学業をかなり犠牲にしている	学業を少し犠牲にしている	学業に影響はない	学業にプラスになっている	無回答	
学部生	n 95	629	2006	146	42	2918
	% 3.3%	21.6%	68.7%	5.0%	1.4%	100.0%
大学院生	n 10	45	431	73	10	569
	% 1.8%	7.9%	75.7%	12.8%	1.8%	100.0%
合計	n 105	674	2437	219	52	3487
	% 3.0%	19.3%	69.9%	6.3%	1.5%	100.0%

*九州大学学務部（2016: 51）に基づき作成。

以上のように、学生モニターのプレ・アンケートの回答と学生生活実態調査のローデータの分析結果の間には、少なからぬ乖離が存在した。一見尤もらしいアルバイト・課外活動悪玉説に安易に依拠したまま議論を進めるべきではないことが明らかとなった。

3.3. 第1回学生モニター会議

第1回学生モニター会議は、新中央図書館（伊都）のアクティブラーニングスペースを会場として6月21日に開催された。上記に示したようなプレ・アンケートの集計結果や学生生活実態調査のローデータの分析結果を会議冒頭で共有した上で、22人の参加者が5～6人からなる4グループに分かれ、学習時間が短い真の理由とその対策を議論した。留学生が参加していたため、殆ど英語のみで議論を行うグループも見受けられた。グループでの議論の結果をまとめたパワーポイントのスライドをMoodle経由で全体共有した後に、各グループの代表者が概要を説明した。

第1回における議論を簡単に要約すると、学習時間が短くなる主な理由としては、「試験対策さえ卒なく行えば単位がとれてしまう」「成績（GPA）が問題になる場面が学内の・社会的に少ない」「九大入学がゴールで今の最重要目的が卒業・就職となっている学生にとって授業内容がモチベーションに寄与していない」等のことが主な理由として語られた。また、そのための対策としては、「実社会との関わりを意識させる教育」「教員の意識の変化（適切な量・難易度の課題・宿題や、成績評価への反映等）」「図書館や充電場所などの施設面の整備」等が重要であるとの提案がなされた。

なお、先述のアルバイトや課外活動に関する分析結果に依拠して、それらは学習時間を短くする原因ではないとする意見が散見された。ただし、次の点には引き続き留意すべきと考えられる。表9は、表4に示した各活動時間間の相関係数をp値が小さい順に10組抜粋したものである。ここでまず注目したいのは、予習復習と授業出席との間の有意な正の相関である（ $r=0.443$ ）。これは、単位を取るため必要とされる程度の予習復習時間が各授業で確保されることを意味していると考えられる。次に、アルバイトおよび課外活動と、自主的な学習との間の相関係数の符号が、どちらもある程度の大きさの負の値（それぞれ $r=-0.300$ と $r=-0.291$ ）となっている。どちらも統計的に有意ではないが、サンプルサイズがもう少し大きければ有意だった可能性が十分にある。これらを考え合わせると、大学卒業・修了を望む限り予習復習時間は容易に減らせないため、アルバイトや課外活動で忙しいと自主的な学習時間から優先的に削られている虞がある。もしそうだとすると、予習復習時間との関係だけを見てアルバイトや課外活動が学業に及ぼす影響を検討することには慎重にならなければならない。筆者は第1回学生モニター会議の冒頭でこの分析結果も示して注意を促した。しかし、この点に関して学生モニターの議論は深まらなかったようであった。

表9 各活動時間間の間の相関係数（ $n=26$ ）

変数	vs. 変数	r	下側95%	上側95%	p値
Q07_研究	Q05_授業出席	-0.671	-0.840	-0.383	0.0002 ***
Q14_その他の	Q07_研究	-0.516	-0.753	-0.160	0.0070 **
Q07_研究	Q06_予習復習	-0.482	-0.733	-0.117	0.0126 *
Q06_予習復習	Q05_授業出席	0.443	0.067	0.708	0.0236 *
Q10_通学	Q09_睡眠	-0.413	-0.690	-0.030	0.0361 *
Q12_就労（社会人のみ）	Q09_睡眠	-0.398	-0.680	-0.012	0.0441 *
Q14_その他の	Q11_課外活動	-0.371	-0.663	0.019	0.0618
Q11_課外活動	Q05_授業出席	0.360	-0.032	0.656	0.0711
Q13_アルバイト	Q08_自主的な学習	-0.300	-0.616	0.099	0.1364
Q11_課外活動	Q08_自主的な学習	-0.291	-0.609	0.109	0.1499

***は0.1%水準、**は1%水準、*は5%水準で有意。

3.4. ポスト・アンケート

6月下旬には、第1回の会議に参加できなかった学生モニターとも当日の議論を共有するため、上述の各グループから提出されたスライドを簡単に取りまとめ、諸々の分析結果等と共に Moodle 及び BookRooll を用いて全員で共有した。そして、第1回の内容を確認した上でポスト・アンケートへ回答するよう依頼した (n=21、回答率 46.7%)。ポスト・アンケートでは、様々なデータの分析結果や、第1回の会議で他の学生モニターと話し合ったこと等も踏まえた上で、学習時間が短い真の理由とその対策についての自由記述回答を求めた。

表 10 はポスト・アンケートの頻出上位 50 語の一覧である。番外の語も含めプレ・アンケートと比べると、「アルバイト」(プレ 16 回→ポスト 9 回) と課外活動 (同様に 14 回→5 回) は大幅に出現頻度・順位を落とした。一方で、「目標」(12 回→25 回)、「将来」(5 回→23 回)、「社会」(6 回→15 回)、「研究」(3 回→11 回)、「モチベーション」(6 回→9 回) 等の語は、ポスト・アンケートの方が回答者数は少なかったにもかかわらず、出現頻度・順位を上げた。一連の議論を通して学生モニターの問題意識が、学習意欲をいかに高めるか、その際に大学での研究と社会とのつながりや将来の目標を意識することがいかに重要であるかという点に集約していったことがうかがえる。

なお、日本人学生からはアルバイト (の背景にある経済的状況) に原因を求める意見が見られなくなったが、留学生の回答 (2 件) には、引き続き経済的観点からの意見が見られた。

表 10 ポスト・アンケートの自由記述回答の頻出 50 語*

抽出語	回数	抽出語	回数	抽出語	回数	抽出語	回数	抽出語	回数
授業	113	人	26	機会	15	教育	13	良い	11
学生	99	目標	25	教員	15	行う	13	育成	10
思う	73	時間	24	言う	15	持つ	13	提供	10
勉強	69	講義	23	社会	15	方法	13	アルバイト	9
大学	43	将来	23	取得	15	多い	12	モチベーション	9
考える	41	内容	23	理由	15	面白い	12	一つ	9
単位	40	興味	21	学ぶ	14	科目	11	学び	9
自分	37	参加	19	成績	14	研究	11	具体	9
学習	28	教授	18	評価	14	実際	11	高校	9
必要	27	アクティブ・ラーナー	15	問題	14	多く	11	対策	9

*一部の語は以下のように置換した上で分析した。生徒→学生、サークル・部活→課外活動、バイト→アルバイト、教師・先生→教員、九大→九州大学。また、「課外活動」「アクティブ・ラーナー」「モチベーション」は語として強制抽出した。留学生からの英語の回答 (2 件) は、筆者が日本語訳した上で分析対象に含めた。

3.5. 第2回学生モニター会議

7月19日開催の第2回学生モニター会議の冒頭では、ポスト・アンケートの結果がフィードバックされた。その上で、19人の参加者を4グループに分けて、理事報告会用の資料作りを念頭に学習時間が短い真の理由とそれへの対策を議論し、最後に議論の内容を共有した。

各グループからは、「筆記試験で修得度を測り得る授業科目では、むしろ厳格な期末試験一発勝負を（TA 配置などの学習サポートにも配慮したうえで）徹底したほうが、真剣かつ計画的に学習に取り組まざるを得ず、主体的な学習姿勢を身に付けさせることができるのではないか」「教員は学生の理解力を過信していると思われるので、出席カードなどを用いて双方のコミュニケーションの機会を増やす方がよいのではないか」「早期に研究に触れる機会を設けたり、研究上の短期的な目標を立てて達成していくように指導したりすることで、モチベーションを維持向上できるのではないか」「大学の実施する様々な取り組みについて多くの学生に効果的に周知するため、学生主体の広報組織を育成する必要があるのではないか」等の提案が行われた。

その後は、代表学生 2 人がこれまでの議論の内容を理事報告会用資料として取りまとめた。

4. 理事報告会

4.1. 学生モニターからの報告

8月8日、教育担当理事・副学長に対する報告会が開催され、「九大学生の学習時間はなぜ短いのか～真のアクティブラーナーになるために～傾向と対策」と題した学生モニターからの報告に続き、理事との質疑応答が行われた。例年通り学務部長、学務企画課長等の幹部職員や事務担当者数人が陪席しただけでなく、今回は理事・事務局長も臨席した。参加した学生モニター7人の内訳は、男：女=5：2、学部：大学院=3：4、文系：理系=1：6、日本人学生：留学生=5：2であった。

まず、代表学生 2 人から、「アルバイトや課外活動への注力は、学習時間が短い原因と言うよりも、むしろ学業を優先しないことによる結果である」「授業方法等の教育システムにも改善の余地がある」「教員にとって研究や授業内容の学術的・社会的価値は自明かもしれないが、学生はそういった関連を感じにくい」といった課題が指摘された。その後、学習時間が短い真の理由とその対策について、「①大学側」（授業の内容、指導方法、成績評価における課題）、「②学生の姿勢」（関心や目標の欠如への対応）、「③その他」（学習環境や留学生への配慮）の 3 つの観点から、プレおよびポスト・アンケートの結果やグループワークにおける議論の内容を踏まえて説明が行われた。

①の観点からの報告は表 11 に、②の観点からの報告は表 12 に示すとおりである。これらの表は、学生モニターが作成したスライドの該当ページに基づき筆者が再構成したものであるが、字句や内容等に対する変更や省略は一切行っていない。なお、③その他の観点からは、「通学が不便で疲れやすい（+交通費が高すぎる）」「留学生に対する奨学金が足りない」「アルバイトで忙しい」「24 時間体制で学習に使える施設がない」「PC を（必携化しているのに：筆者注）充電できるスペースが少ない」という点について報告があった。

表 11 学生モニターからの報告「観点① 大学側」*

	【真の理由】 大学側の運営方法に問題がある	【対策】
内容	<ul style="list-style-type: none"> ・授業の目的が不明瞭（シラバスとの齟齬） ・学生の関心をそそらない授業内容 ・授業がそれぞれで完結しており、関連がわかりにくい ・授業形態が学生のやる気を引き出しにくい ・授業の到達目標と学生のニーズがずれている 	<ul style="list-style-type: none"> ・授業の目的を明確にする（シラバスに明記する） ・レジュメの音読のような授業になっていないか視察 ・関連付けができそうな講義を持つ二人の先生が共同で担当する授業を追加する ・グループワークやワークショップ、成果発表などの仕組みを取り入れる ・シラバスで実際の授業の様子が写真や映像で見られるようにする ・教員と学生、学生同士がコミュニケーションをとれるような授業設計を行う <p>→・授業アンケートを各学期に二度行い、講義に反映させる</p>
指導方法	<ul style="list-style-type: none"> ・教員に学生を惹きつける能力がない ・先生が学生の理解する力を過信している ・テキストの活用をし切れていない 	<ul style="list-style-type: none"> ・ディスカッションや教員との討論など双方向性を意識した授業を行う ・課題や小テストを適度な難易度で学生に課す
成績評価	<ul style="list-style-type: none"> ・実力に見合った評価がもらえない ・講義の成績評価基準が統一されていない ・シラバスに沿わない曖昧さがある 	<ul style="list-style-type: none"> ・極端な授業の成績評価方法を見直す ・授業全部を通した態度や姿勢を全般的に評価するようにする ・GPA が一定以上の数値でなければ志望する研究室にいけない仕組み

*平成 29 年度九州大学学生モニター（2017: 11-12）に基づき作成。字句、内容等は原文ママ。

表 12 学生モニターの結論「観点② 学生の姿勢」*

【真の理由】 学生のモチベーションが低い	【対策】
<関心がない> ・勉強<課外活動（サークル、部活動、バイトなど） →大学は人生の夏休みを過ごせる場所と思っている ・自分が何に興味があるのかわからない →高校までの受身的な学習から抜け出せない →学びの意義が見いだせない ・授業が何の役に立つのかわからない	<モチベーションを上げる機会の提供> ・早い段階で社会に触れる機会を作る（例：インターンシップを授業の一環で行かせる） ・社会人や就活中の学生、院生、学外の著名人との交流の場を設ける ・低年次のうちに高校までとは大きく違った内容の授業を提供する ・学生と大学の情報をつなぐ学生アンバサダーを設置する（既存の制度を学生が学生によって最大限に活用できるように）
<目標がない> ・将来の具体的な目標がない（目先の単位取得や卒業に目標がある） ・勉強＝頑張ること／勉強＝嫌なことという図式ができていて、勉強したくない ・講義が将来にどう繋がるのか分かりにくい	<目標設定> ・短期目標、長期目標を設定する（入学時に書かせ、メンターなどが随時チェックをしアドバイス） ・将来ビジョンに関するアンケートを実施 <自主性を伸ばす> ・自主的に実験、実習ができる機会を設ける ・学生の授業の選択をできるだけ縛らない ・自学によって認定される教科を増やす ・基幹教育の単位を専攻教育の単位で置き換えられる仕組みを作る

*平成 29 年度九州大学学生モニター（2017: 13-14）に基づき作成。字句、内容等は原文ママ。

4.2. 質疑応答の概要

学生モニターからの報告に引き続いて、理事らと学生モニターの意見交換が行われた。学生の立場からの大学教育への疑問や提案について、活発な議論が交わされた。両理事からは、むしろ学生側から積極的に教員とコミュニケーションをとることの重要性や、（例えば指定教科書を万遍なく解説することを期待するような）高校までの学びのスタイルから脱却することの必要性など、学生側に期待されるアクティブさについても指摘がなされた。また、海外の大学生と日本の大学生との学習者としての意識の違いについて、参加していた留学生らの実感も交えて議論された。

最後に、教育改善に向けた取り組みの参考にすべく、報告内容を全学的に共有することを確認し、報告会は終了した。なお、学生モニターからの報告資料は、平成 29 年度第 4 回教育企画委員会（9 月 1 日開催）の報告事項として全学に周知された。

5. おわりに

平成 29 年度学生モニター会議では、LMS の活用、アンケートや会合の複数回実施、様々なデータの分析結果のフィードバックといった工夫が図られた。プレ・アンケートとポスト・アンケートの間の回答傾向の変化は、こうした工夫が学生モニターに丁寧な議論を促したことを示していると考えられる。個々の提案の妥当性や実現可能性などについて評価・検討することは、本稿の課題ではないので差し控える。ただし、学生目線から見た九州大学の教育と学生自身の課題が、何らかの形で整理、共有されたこと自体には、一定の意義があったと考えられる。今回用いたデータやその分析結果には様々な制約が存在するが、本報告が今後のデータに基づく議論の一助となれば幸いである。

最後に、今回学生モニター会議に関与した中で度々意識させられた以下の 2 点について記したい。一つめは、大学教育の様々な課題について検証したくても、そのためのデータが必ずしも十分ではない点である。一例を挙げれば、表 9 に関して指摘したように、経済的な困難さが学習活動全般にどれほどの影響を及ぼしているのか（見方を変えればどのような経済支援策が有効か）を検証することは、現有のデータでは困難であった。仮に、表 4 のような学生の時間の使い方に関する情報が、教育や学生支援に関する情報と共に分析可能な形で蓄積されたならば、様々な場面で活用できるのではないだろうか。二つめは、大学（教員）と学生との間の、認識・期待等に少なからぬ隔たりが存在していることである。或いは少なくとも、学生は隔たりを敏感に感じ、それを大学教育に対する不満と結びつけやすいようである。学生モニターの提案等の中には、むしろ他の問題を惹起させるのではないかと危惧される対策や、学生側の積極性こそが期待されているような課題も見受けられる。とは言え、授業内容や研究の持つ学術的な意義や社会との繋がりや、学内の様々な対応等の運営上の必要性は、大学や教員にとっては自明かもしれないが、学生にとってはそうではなく、仮に伝える手立てを講じたとしても、おそらくそれほど伝わってはいない。どのような教育改善策の検討も、こうした点について十分留意しておく必要があるのではないだろうか。

謝辞

延べ数時間に及ぶ会議や報告会のみならず、プレおよびポスト・アンケートにご回答いただいた学生モニター各位に、この場をお借りして改めて感謝申し上げます。

参考文献

- 九州大学, 2016, 「九州大学学生モニター制度要項」.
- 九州大学学務部, 2016, 『平成 27 年度学生生活実態調査報告書』. (<https://www.kyushu-u.ac.jp/ja/university/publication/statistics/research/>, 2017. 8.18.)
- 九州大学学務部学務企画課, 2017, 「平成 29 年度学生モニター会議について」(平成 29 年度第 1 回教育企画委員会資料).
- 平成 29 年度九州大学学生モニター, 2017, 「九大生の学習時間はなぜ短いのか～真のアクティブラーナーになるために～傾向と対策」(理事報告会用資料).

